

# 「畢竟依を帰命せよ」

河智義邦



『讚阿弥陀仏偈和讚』に「清浄光明ならびなし、遇斯光のゆゑなれば、一切の業繋ものぞこりぬ、畢竟依を帰命せよ」(『註釈版聖典』557頁)という一首があります。これは、親鸞聖人が阿弥陀仏・浄土を私たちの「畢竟依」(究極の依りどころ)として生きていくことを勧められたものです。同じような趣旨を明かされたものとして、「化身土巻」に引用された「<sup>いざいなん</sup>帰去来、他郷には停まるべからず。仏に従ひて本家に帰せよ。本国に還りぬれば、一切の行願自然に成ず」(同411頁)という『法事讚』の文があります。

親鸞聖人は、阿弥陀仏・浄土を私たちが<sup>まこと</sup>真の依りどころとすべき指針で、本来的に住むべき真実の世界であることを、お念仏のみ教えを通じて説かれています。それは、私たちの「生の依るところ・死の帰するところ」ともいうべき世界に目覚めていくことの大切さを述べられたものでもあります。まさしく、私たちのいのち(生命、人生)の依りどころを明かされたのが上の言葉です。ここでは「生の依るところ」の意味を考えてみたいと思います。

親鸞聖人は、阿弥陀仏・浄土をさと(智慧と慈悲、自利利他円満)の象徴として捉えておられます。阿弥陀仏とは念仏(名号)となって私たちをさとりの世界へ導く唯一の存在、浄土とは私たちが目指すべきさとりの世界そのものであるということです。その阿弥陀仏に導かれ浄土に往生していくことを目的とするなかでさとりの教え(智慧慈悲)の内実を学んで、世俗生活のなかにその教えを生かし実践するところに浄土門仏教の特色があります。

『蓮如上人御一代記聞書』には、廊下に落ちていた一枚の紙を拾って「仏法領の物をあだにするかや」(同1332頁)と言われた蓮如上人の言葉が伝えられています。仏法領とは、全てのものはみな仏様のものであるから、物や人との出会いなどあらゆることを大切にしなければならないという思想を表現した言葉で、上人はたとえ紙切れ一枚であっても仏様の物であるのだから、粗末に扱ってはならないといわれています。

全てのものは縁によって生じ、縁によって滅すという縁起の道理の元で私たちは生きています。言い換えるならば、独立して固定的な性質をもつ

て生きているもの・存在は何一つ無く、あらゆる存在は相依相関のなかでお互いを生かしあっているといえます(=智慧)。だからこそ、全てのものには無駄なものはなく、大切に扱っていかねばならないのです(=慈悲)。「仏法領」の思想にはそうした仏教のさとりの世界の内実が見事に反映されています。

日頃、この縁起の世界のなかで、私たちはそうした点を見落としがちな暮らしを送っています。現実の競争社会のなかで自己が損をしないように損得勘定を中心の生活を送っています。というより、送らざるを得ません。そうした現実を無視して綺麗なことを言うつもりはありません。現状は受け止めつつ、しかしそうした生活のなかにも忘れてはいけない考え方があることを念仏のみ教えは私たちに教えてくれるのです。「私さえよければ」と考えるのが私たちの行動原理としてこの身体の中にあることは否めません。私自身も、縁にふれてチラホラ(どころではないかもしれませんが…)それが顔を見せることがあります。それこそが凡夫の正体です。私は開き直るつもりはありませんが、凡夫の自覚をもてて良かったと思っています。もし自分が凡夫であることに目覚めなければ、きっと自己中心の行動原理でしか生きていけなかったかもしれないからです。凡夫の自覚がなくても生活はできます。しかし、それは他者の痛みや苦しみへの共感力や、自らがその痛みなどの原因を作っている、あるいは他者に迷惑をかけているかもしれないということについての内観力の喪失を意味するものと思うからです。現実的に私たちは他者との関わりによって生活の糧を得、他者のいのちを頂いて生活をしています。

愚かさの自覚は仏縁がなくてももてると思います。しかし、そこに留まるのではなく、そうであるからこそ阿弥陀仏のような自利利他円満な存在になっていきたいと願い生き続けていくところに、私は大きな人生の意義を感じます。そして、そのような仏に成っていくことを目指した凡夫のために開かれたのが浄土門仏教なのです。

阿弥陀仏は、常に念仏(名号・南無阿弥陀仏)となって「私(阿弥陀仏)に帰せよ(南無)」と呼びかけていると説かれています。それは「私のところに帰せよ」いうことです。その「ところ」とは、先のさとりの内実そのものを指します。ですから私たちは日暮らしに追われるなかで、いつでもどこでも実践できる称名念仏を申すなかに、凡夫の自覚のさらなる深まりとともに、見落としてはいけない広いいのちの世界に目覚めさせていきたいのです。ここに「生の依りどころ」といわれる意味を見いだすことができます。 (岐阜聖徳学園大学准教授：真宗学)